



昨年12月に開業したベトナム・ホーチミン市の都市鉄道(メトロ)1号線(ベントイン・スオイティエン間)に乗り込んだ。国際協力機構(JICA)による円借款事業「ホーチミン市都市鉄道建設事業」は2012年の本格着工後、12年の歳月をかけて開業に至った。初めてホーチミンを訪ねた16年には、市内中心部にある人民委員会庁舎前に大手ゼネコンとJICAの大きな看板が掲げられていた。日本の技術や資金面での支援がベトナムの発展に貢献していることを誇らしく思った。

ベトナムで都市鉄道が開業

最も多い敷地内に約2千軒の個人商店が集まっており、食材、衣類、日用品などが売られ、人々の暮らしを支えている。市場にとって、110年の節目にメトロが開業したことも決して偶然ではないと感じた。

メトロ1号線は総延長19・7キロで、ベントイン駅から北東に向かっていて、真新しい日本製の電車に乗り、終着駅を目指した。途中の駅には大学や研究施設もあり、今後は駅を中心にアパート、商業施設、ビジネスオフィスが立ち並び、郊外の都市整備が進むことが想像できた。ベントイン駅にはメトロ路線図が掲示されているが、すでに11号線まで路線計画があることに驚いた。

東南アジア各国では、経済の発展と共に都市圏における人口や交通量が増加している。そして今、交通渋滞や大気汚染が各国共通の社会問題になっている。タイのバンコクにも都市鉄道(BTS)が運行している。開業はホーチミンメトロの25年前、99年12月である。25年間で13路線まで拡張され、市民の足として定着している。



インドネシアの最大都市ジャカルタにおいても、ジャカルタ都市高速鉄道(MRTジャカルタ)が南北線の1区間が2019年3月に開業した。今では郊外から首都圏に向かって交通渋滞は大幅に緩和されているという。

ベトナムの都市鉄道事業はまだ始まったばかりであると言える。中間所得層が増えるベトナムでは今後、車の普及が進むことが予想される。その前に都市鉄道を整備すれば、歴史あるホーチミンはいつまでも観光都市としての姿を残しつつ、人々が豊かに暮らせる街としてさらに発展するであろう。

(岐阜信用金庫バンコク駐在員 事務所長 高橋英孝)

渋滞緩和、街発展の好機